



TITLE:

<批評・紹介>野澤豊・田中正俊等
編「講座中國近現代史 第一卷 中國
革命の起點」

AUTHOR(S):

小林, 善文

CITATION:

小林, 善文. <批評・紹介>野澤豊・田中正俊等編「講座中國近現代史 第一卷 中國革命の起點」. 東洋史研究 1979, 38(2): 265-271

ISSUE DATE:

1979-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153731>

RIGHT:

批評・紹介

講座中國近現代史 第一卷 中國革命の起點

野澤 豊・田中正俊等編

昭和五十三年四月 東京 東京
大學出版會 A5版 二九六頁

「中國近現代史の提起する諸課題をあらためて見直し、とりわけそこにおける中國民衆の苦難と苦闘の歴史を掘りおこす」という目標の下に編集された本書は、アヘン戦争から太平天国にいたる民衆闘争を中心とする一〇篇の論文を収録している。まずその概要を知るために目次を掲げ、つづいて各論文の内容を簡単に紹介しながら、必要に応じて論評を加えていくことにしたい。

總論

資本主義Ⅱ植民地體制の形成とアジア

危機意識・民族主義思想の展開

民衆反亂史研究の現状と課題

廣西社會と農民の存在形態

廣東抗英闘争

捻子運動

白蓮教・黒旗軍の反亂

回族起義

清末地主制の再編と農民

高橋 孝助

田中正俊論文は、中國近現代史研究の課題を明らかにすることを目的として書かれた。すなわち近代資本主義を成立させた西洋にとって、中國に對する「ウエスタン・リム・パクト」は必然的な要請であり、中國の近代化にとっては敵對的な客觀的條件として機能した。また中國における近代化を擔う變革主體としての人民大衆の闘争の目標は、みずからブルジョアになることにとどまらず、さらに生産手段の社會主義的所有（社會主義革命）に至ることであると、かかる變革主體の闘いと實踐の過程が、「半植民地Ⅱ半封建社會」の變革過程を特色づける、と結論する。

濱下論文の内容について述べる、イギリス—インド—中國を結ぶアヘンを媒體とする三角貿易は、一八五〇年代の米國とオーストラリアにおける金發見を契機に國際金融市場が擴大したために動搖し、イギリス—中國—米國を結ぶ三角貿易が新たな重要ルートとして注目され、東インド會社はその歴史的使命を終えることになった。これに代わりロンドンの金融市場を據點とする植民地銀行が、英—中—米の三角貿易の擴大・發展を狙いつつ、アジアの金融支配に乗り出して貿易關係の決済をロンドンに集中した。

かかる植民地銀行や大洋行（外國商社）は、その世界的規模での金融力をもって中國を金融的に從屬させ、中國での金銀比價を金高に維持する人爲的操作などを通じて、巨大な爲替差額利潤や貿易關係の利益を獲得した。また中國國內の錢莊とも結託し、銀貨價格の高低による銀「銀」比價や銀錢比價等の諸條件を利用して、上海の金融市場のみならず農村金融にまでその支配を及ぼし、さらに中國

に對して貿易關連事業への資本投下や軍事・政治借款を行なうことによつて、列強のアジア進出の先導的役割を演じたとする。

この論文は壯大なスケールを持ち、中國をめぐる國際金融問題を巧みに整理した力作である。ところで氏の論旨に従えば、イギリスの金融勢力を代表する植民地銀行・大洋行は、一九世紀中葉には世界の金融市場を支配し、金銀比價を操作して、上海の金融市場から農村にまでその影響力を浸透させるだけの絶對的な力量を持っていたことになる。では實際に「イギリスの金融的支配—中國の金融的從屬」關係はどの程度まで貫徹し、英の金融的支配は農村にどの程度まで浸透していたのであろうか。その浸透状況を、二〇世紀の國家獨占資本主義段階における帝國主義列強の中國に對する金融的支配の浸透状況と比較検討し、その質的・量的差異をふまえて議論をすすめないと、一九世紀のイギリス資本主義の金融的支配の強力性のみが前面に押し出されて、英—中の「金融的支配—從屬」關係の段階的深化の歴史的・具體的様相が明らかにならないように思われるのである。

また軍事・政治借款の評価についても疑問が生じてくる。一八五三年から六五年にわたる軍事・政治借款に對して、氏は相當のウェイトを置いておられるようだが、この期間の借款の總額を合計しても、清佛戰爭當時の一八八五年一年間における借款總額のわずかに七・一%（額面）にしかならないという微々たるものにすぎず、そのためかかる初期の借款に對して過大な評價をしてはならないであらう。

さらにこの論文で取り扱われている中國は、イギリス資本主義に自由に收奪され、蹂躪される無抵抗な客體であるという印象が強

い。そこで民衆鬭争の重要性を論證することを共通の意識的前提として編集されていると思われる本書の精神に沿つて、次の機會には、例えばこの時期に反侵略の旗幟を明らかにして上海近郊に迫りつつあった太平天国の勢力が、かかる國際金融構造に及ぼした影響—實際にこの時期には上海の金價格の變動は激しかった—を分析するなど、中國側の主體性を重視する觀點より國際金融問題を考察されることを期待したい。

田中正美論文の内容は、一八三〇年代に急増するアヘン貿易について、プロテスタント宣教師とスコットランド出身の長老派系大アヘン商人が、中國の大小商業資本と結託して推進し、腐敗した清朝の支配機構がそれを促進したが、それによってアヘン吸飲が増大して清朝權力の支柱たる軍隊に蔓延し、吸飲する官僚はその費用を民衆に轉嫁して多くの問題を惹起した、とする。

かかる問題の解決のために、許乃濟は經濟主義的觀點より弛禁論を上奏したが、その不當性を指摘し、政治的觀點より嚴禁論を上奏したのが朱嶠・許求らであった。後者の主張は「財」よりも「民」を重視する「民本主義」であり、對内改革の先行をめざすものであった。許乃濟の弛禁論が廣東の行商と結ぶ書院紳士の意向を代辯したのに對し、朱嶠・許求らは自作農・中小地主層を據り所としたが、政策實施のための有効な具體策を持たなかった。ここに一つの具體策を提起したのが吸飲者死刑という嚴禁論を唱えた黃爵滋であつて、林則徐・魏源らの官僚グループとともに「抵抗派」を形成し、琦善らの「投降派」に對抗した。かかる「抵抗派」の「民本主義」は支配階級からの發想であるが、その思想と經世策は民族的連帶の絆となつたのである、と結論する。

この論文は、氏が從來より追究されてきたアヘン戦争期における「抵抗派」の思想研究の集大成とも考えられ、宣南詩社に關する新たな見解も加えて、説得力に富む内容となっている。しかし「抵抗派」の階級的基盤に關する實證的究明を行なわず、「民本主義」の具體的内容と位置づけも明確にせぬまま、「抵抗派」の思想と經世策が「階級を超えた民族的連帶の強靱な絆」となったと結論するのは、いささか短絡ではないだろうか。「抵抗派」の階級的基盤とはたした役割についてのより一層精緻で具體的な論證を期待したいと思う。

森論文は、氏自身の「前近代から考えていく際の論理と近代史そのものにとりくんだ際の論理とが分裂している」という研究課題を解決するための一作業として、民衆反亂史研究の現狀を追跡し、手ざわよく整理している。まず日常的な抗租・抗糧闘争と政治的・宗教的反亂とを區別し、前者から後者へと飛躍する際の契機を革命的な政治的・宗教的世界觀に求める小林一美氏の見解を高く評價し、同様の立場に立つ相田洋・濱島敦俊兩氏の研究を紹介する。さらにさかのぼって田中正俊・横山英兩氏の先驅的研究に見られる經濟闘争と政治闘争を區別する姿勢に言及し、また白蓮教反亂の研究發展に貢獻した佐野學・鈴木中正・安野省三各氏の業績にふれ、抗租・抗糧闘争とその頂點に立つ太平天国を精力的に研究してきた小島晋治氏の研究を分析する。

そして氏は最後に、一七世紀に最も普遍的な民衆闘争は奴僕の反亂・奴變であり、一八世紀に全華中・華南規模で抗租闘争が恒常化し、この量的變化にもとづいて一九世紀前半には質的變化が起こっ

た。また白蓮教の教義や結社自体も日常闘争を通じてかかる質的變化を準備したが、何よりも革命的情勢を醸成し實踐したのは民衆自身である、と結論される。

氏の要を得た研究史の整理は、後學にとって参考になるが、今後は氏の民衆闘争の變化・發展に關する上記の試論を實證的に檢證していただきたいものである。

西川論文は、太平天国運動の研究にとって發生地である廣西社會の農民の存在形態の解明が重要であるとの問題意識の下に、潯州府の農村構造を分析する。この地方での農民層分解が階級矛盾を増大させて、「外匪」が鄉村の「匪徒」と結託しはじめたために、鄉紳が中心となって一八三〇年代に「安良約」を成立させ、四〇年代にはさらに多くの鄉村の支配層を糾合して社會を設置し、保甲を編成して、鄉紳層は廣東商人と結び、その支配體制の動搖を防ごうとした。そして廣東商人でありながら廣西省の貴縣に定着して、地主・高利貸として發展した林氏の系譜をたどりながら、かかる三位一體的「紳商」の發展過程が廣西農民の没落過程であった、とする。

廣西は廣東のヒンターランドとして廣東商人の經濟的支配を受けており、廣西農民が佃戸・零細自作農として小作料・稅負擔に苦しみ、肥料の前貸しを通じて商人に隸屬し、米穀・落花生・藍・桂皮・木炭等の商品作物の生産者として流通過程を支配する廣東商人に買いたたかれ、雇農・落花生の搾油工・鑛夫・擔夫などの勞働を通じても商人・地主等の搾取を受けるといふ、二重三重の收奪に苦しむ情況を浮きぼりにする。

この論文は、丹念に史料を發掘して廣西農民の存在形態を明らかにするとともに、「經濟的先進地帯における農民闘争のみが變革的

であり先進的である、と考える經濟主義的思考法」に對して反省を迫る勞作である。ところで氏は、廣西の農民が「後進的地主制のもとで地主に強く隸屬する佃戸」であり、廣東に「食料・手工業原料等を供給する商品生産者」であつて「村外に勞働の場を持つ『雇工』としての側面」をも兼ねると結論されるが、商品作物の生産者であり、外の世界に出稼ぎし、外界からの收奪の洗禮をまともに被つた農民たちが、はたして「地主に強く隸屬」していたのであろうか。氏は前半の部分で「安良約」や社倉の設立を、郷紳（地主）による支配の動搖の反映とらえておられるので、最後に「地主に強く隸屬する佃戸」と結論されるのは矛盾ではないだろうか。むしろ農民たちが、商品作物生産者として外界に目を向け、郷紳的・地主的支配を拒否する意識を培つていたために、一八四〇年代に上帝教はかくも急速なスピードで擴大・發展しえたのではなかつたらうか。

また氏は、太平天国運動初期の禁欲主義・私財否定等の革命精神が南京入城後まで貫徹された、とする立場から廣西農民と上帝教との關係が太平天国に與えた影響を重視しておられるが、『金陵癸甲紀事略』『張繼庚遺稿』等の官紳側史料によれば、南京入城直後の廣西省出身者の太平天国中に占める比率は一二％と推定され、たとえ廣西省出身者が指導層を占めていたとはいえ、初期の革命精神を堅持できたかどうか疑わしいと思うのである。したがつて廣西省から持ち込まれた上帝教の精神と、長江流域の革命的人民の持つ抗租鬭爭などに現われる抵抗の精神との相互作用を説明することも重要ではないだろうか。

夏井論文は、アヘン戰爭期の廣東における三元里鬭爭に代表され

る抗英鬭爭から一八五四年の天地會の反亂にいたる一連の鬭爭に關して、それを擔う變革主體の基盤・官と民との關係・社會矛盾の影響等の説明をめざしたものである。

廣東は同族の村落が多く、その宗族的結合は族人の生活を保障しつつ清朝の鄉村支配の末端組織として機能し、族内における支配層と族人との階級關係を堅持して、内部での抗租を防ぐ機能をはたしてきた。かかる宗族を糾合して社學を中心に農村における支配體制が築かれたのに對し、廣州城内では各書院がその役割をはたした。官僚は抗英鬭爭の中心となつていたこの組織を次第に保甲のための組織に改編し、官・紳・士・民という支配體制を強化した。だがアヘン戰爭後の社會矛盾によつて大量の失業者が生み出され、彼らは族的結合とは異なる新たな組織としての天地會に流入し、中小宗族もまた族ぐるみ、郷ぐるみで天地會の反亂に参加していった、とする。

氏は、生み出された大量の失業者が「現實社會の父子・同族・君臣關係を斷つことによつて、天地會に『異姓拜兄弟』という擬制的兄弟關係を見出し、これに参加」したとされ、また中小宗族が「族ぐるみ、郷ぐるみで天地會の反亂に参加」したとされる。そうであるならば、中小宗族の持つ族内における上下の階級關係はどのように變化したのであろうか。それとも天地會側は、反亂擴大のためにかかる中小宗族の受け入れに關して何らかの妥協策を餘儀なくされたのであろうか。この點に關する説明が十分になされていないように思われるのである。

太田論文は、小野信爾氏の「捻子と捻軍」(『東洋史研究』二〇一—)に對する批判を目的として書かれた。すなわち小野論文は、第

「一に「土豪」がなぜ「封建的支配維持のため」捻子運動を指導し、「專制權力貫徹の對立物に轉化」したのかという内的必然性の論證に缺けること。第二に宗族集團に對する固定的な見方を基礎にして捻子首領「土豪」説を主張している、と批判する。

そして主として現地採集の歌謡・傳説等に據りながら、捻軍蜂起の中心地である淮北では紳衿の大戸・大財主が特權をむさぼり、一般民戸は清朝の苛斂誅求と自然災害の最大の被害者となり、かかる民衆は宗族的結合を基礎に捻子を組織して地方官衙と大財主に鬭争を集中した。また捻子の指導者たちは族中の有力者としての性格を有していたが、鬭争の中で宗族集團は大財主による民衆支配の手段として利用されるという後進的遺制としての性格を脱し、民衆の生活を防衛し、抑壓と擄取に抗する民衆自身の組織として再生したという。

たしかに氏の指摘されるように「土豪」範疇を嚴密に追究すれば、名だたる捻軍の領袖たちは、小野氏のいわれる「直接の暴力を含めた經濟外的強制力によって、地域的に勢力を張るもの」ではなくなるであろう。だがかかる領袖たちの指導する宗族集團は、はたして後進的遺制としての性格を脱していたであろうか。『剿平捻匪方略』『平定捻匪策』『星烈日記彙要』等の官紳側史料の他に、『安徽史學通訊』の現地調査記録も、大多數の捻子が他郷への掠奪行動に終始していたことを物語っているし、大財主を攻撃してもそれはあくまでも他姓の大財主であった。例えば雒河集捻軍の指導者張樂行の親族には地主もおり、同姓・同族の地主・豪紳との癒着を示す事實もあり、彼の親族は宗族内の有力者であった。捻軍の中で最高レヴェルに達していたこの張樂行の捻軍にしても、太平天国軍と一

時共同軍事行動をとるが、まもなく孤立分散性を露呈して戦線を離脱し、太平軍に深刻な打撃を与えた。かかる歴史的事實は、捻子や捻軍の構成單位となった宗族遺制が、「後進的遺制としての性格を脱して」「民衆自身の組織として再生した」という氏の評價とは相反する現實を物語っていると思うのである。

三島論文の内容を述べると、一八六〇年代前半の山東・直隸・河南三省交界地帯で反亂を起こした白蓮教軍・黑旗軍の運動を取り上げて、抗糧を目的とする白蓮教結社は、官に抗する民團である「團匪」と密接な関連を持っており、その階級的立場は中小地主層を含む中小土地所有者・小農民層にあった。かかる白蓮教系の秘密結社は極貧農層・失業農民と對立し、彈壓する姿勢をとることもあった、とする。

一方、白蓮教五大旗の一部であった黑旗軍は非教徒を數多く含み、「拾麥」農民・「哄花」農民という貧農層と連帶して反封建鬭争を展開した。宋景詩の率いる黑旗軍は偽裝投降を経て第二次反亂に轉じ、鄉紳大地主の民團との鬭いを強め、崗屯を中心に地域的支配を確立し、「土地の再分配」を含む土地「管理」を行なうまでに發展した、とする。

この論文によれば黑旗軍の發展過程はよくわかる。だが官軍への偽裝投降によって教軍に壊滅的打撃を与えた宋景詩と黑旗軍の分裂行動は、この部隊が貧農の利益を代表しているならば、どのような意味を持つのであろうか。また「官への納税を拒否し、官の支配の及ばない地域を作り出し」た黑旗軍の鬭争は、反清・反封建鬭争としての觀點から見ればどのような意義を持つのか、という問題點に關しては、まだ十分に解明されているとは思えないので、さらに一

層掘り下げた分析を望みたい。

神戸論文は、一八五〇～六〇年代の雲南省において、大理を中心に回族の革命政權を樹立した杜文秀と、南方の哀牢山を中心に杜文秀政權に呼應しつつ少数民族（夷族〔彝族〕）による反亂を展開した李文學らの起義軍との關係を解明したものである。

杜文秀政權は當初漢族を重視しながら、他の少数民族を輕視する傾向を持っていたのに對して、李文學らは回族に對して積極的な協力をした。また李文學らの統治體制の中でも注目されるのが土地政策であつて、地主的土地所有を廢止（ただし回族地主には特別の配慮を拂ひ打倒の對象とせず）し、佃戸に土地を分配して、收穫物の二割を納めさせただけであつた。かかる李文學の「夷族」政權は、一八七二年の杜文秀政權の崩壊に至るまで協力を維持し續けたのであつた。

ところで氏は、回族起義研究の上で深めなければならぬ課題の一つとして、「成熟期産業資本（列強）による民族危機・國內封建體制的危機」が回族起義の中にどのように反映しているのかを明らかにする必要がある、と問題提起しておられるが、杜文秀の回族起義と李文學らの少数民族蜂起をとりまく列強による民族危機には言及せず、國內封建體制的危機の分析も十分に行なわれていないように思われる。さらに杜文秀政權の少数民族に對する多少の蔑視観や實際の裏切り行爲にもかかわらず、少数民族側があくまでも積極的な協力關係を維持しようとした、その内的必然性に關する説明も十分に行なつてはしいものである。

高橋論文の内容を述べると、地主政權である清朝の支配下では、地主階級と自作農層は清朝に對する納稅者としての「同質性」を持

つのであり、清朝も税糧減免や科擧の實施を通じて、現實には階級對立をはらむ共同體内部での地主階級と自作農層との「同質性」を喚起してきた。だが太平天国軍の長江流域への進撃の中で、佃農による抗租闘争が高まり、地主階級は名目上の地代である「虚額」と實際の徴收額である「實額」との差額を放棄することを迫られてくる。かかる情況下に包世臣は自作農の救済による抗租闘争の抑制を提唱するが、馮桂芬はさらに一步を進めて、納稅者内部における稅負擔の不公平を是正するという「均賦論」を提唱する。しかしこれは地主階級上層の反對によつて挫折した。

次に吳雲・馮桂芬らによつて提起されるのが「減賦論」であつて、重賦と規定額以上の附加稅の徴收とが抗租闘争をひき起こし、土地所有者の分裂と共同體秩序の弛緩を招くため、これを防止して小土地所有者層を抱き込む目的で清朝側に減賦を要求した。太平天国の支配を覆すために清朝は一定の減賦を承認するが、このことは佃農の日常的な經濟的要求である減租に應えるものではなかつたので、次に「減租論」が問題になってくる。

そして地主階級上層（郡紳）を中心に「虚額」と「實額」の差額を減租として明示しようとする動きが起つたが、その減租率はできるだけ低く抑えられており、欺瞞的なものにすぎなかつた。このことは佃農の抗租闘争の高揚が、地主階級に一定の譲歩をさせるまでに伸長したことを示すとともに、その減租が欺瞞的なものに止まつたのは、佃農の主體的力量的限界を示すものである、とする。

この論文は、清末地主制の再編の過程を、「均賦論」↓「減賦論」↓「減租論」という形で一つの整然たる理論體系にまとめている。だが清末の地主制の展開は、このようにスッキリと割り切ることが

できるものだろうか。

例えば「共同体」の問題を取り上げると、「共同体」内部には絶えざる農民層分解があり、「公正な紳士」を含む大土地所有者は、没落する中小土地所有者の土地を兼併することによって據頭し、勢力を持つにいったと考えられる。かかる歴史的趨勢の中で、たとえ太平天国の影響があったとはいえ、なぜこれらの大土地所有者が「小民」＝小土地所有者に對してその救済を考慮し、その意向を汲みとらねばならなかったのだろうか。またかかる「小民」は「共同体」内部においてそれだけの實力・影響力を持ちえたのであろうか。「小民」と佃農との「共同体」内部における具體的な比重はどうなのか。また「共同体」を回復・維持させる手段として、宗族遺制等による意識的・經濟外的強制方法は用いられなかったのか。かかる「共同体」の實態に關する多くの問題點を分析せずして、地主階級と自作農層との「同質性」の喚起という傾向性を結論づけることはできないように思われるのである。

以上で各論文の紹介を終えるが、本書所收の諸論文を読んで、その鋭い問題提起や緻密な論證に學ぶところが多かった。ただ本書の取り扱っている一九世紀中葉の民衆闘争は、おしなべて「社會矛盾↓蜂起→一時的・部分的勝利↓敗北・挫折」という過程をたどっており、一部には封建反動のため民衆闘争が以前にもまして逼塞を餘儀なくされるという結果を生んできたが、これらの論文の中には、かかる民衆闘争の意義を評價する時に、その闘争が繼續されていた短期間の中で性急にその歴史的意義を結論し、その闘争が發生・展開した地域における一〇〇餘年にわたる近現代革命史の總過程の中

ではたした役割と意義については言及していないものも見うけられた。

評者は民衆闘争の意義を問う時、ウェスタン・インパクトの影響下におかれていた農村「共同体」の實態とその變動、そしてそこに生活する變革主體としての民衆の反封建意識の形成過程と存在形態を問題にしなければならぬと思っている。

一九二〇年代に毛澤東が指導した湖南省の農民運動が「政權・族權・神權・夫權」の打倒を課題としたように、一九世紀中葉の多くの民衆闘争は、華南・華中・華北の不均等發展をしているそれぞれの地域において、例えば封建的同族支配體系の思想・制度に對する挑戦というように、それぞれにとって固有の課題と目標を持って闘われたであろう。中國近現代史における民衆闘争史の發展過程は、封建的な農村「共同体」の解體過程でもあったと思われるので、かかる各地域の農村「共同体」構造の變遷過程とそこにおける民衆の反封建意識の形成過程と存在形態を、舊民主主義革命期から新民主主義革命期にいたる長い時間帶の中で追跡し、解明した上で、それをふまえて一九世紀中葉の民衆闘争の持つ固有の課題と目標を明らかにし、かかる民衆闘争の性格を考察し、位置づける必要があると思うのである。

以上、評者の非力さと怠慢ゆえ、論文の内容紹介における誤りや的はずれな論評も多かったと思われるが、執筆者の方々に對する非禮があればご寛恕を請うとともに、讀者諸賢のご指教を仰ぎたいと思う。

(小林善文)